

李 薇／中国社会科学院日本研究所所長

問題意識：日本は何を以て日本なのか。“日本何以为日本？”

何か、なぜかは中国の研究者にとって研究し尽くせない難問である。特に両国関係がうまくいかない時には、日本はもっと分からない国となる。私もできるだけこの難しい宿題を避けてきた。

中国の日本研究はその時代の日本認識によって変遷してきた。

## 一 学ぶ客体なのか、研究客体なのか

### 1 学ぶ客体に対する希望から失望へ

中国の最も早い日本に関する記述は、古代の地理書『山海経』と『漢書・地理志』である。日本の地理的な場所が記載されている。西暦289年、陳寿が記した『魏志倭人伝』（『三国志・東夷伝』）は、日本古代史に関する最古の資料である。清代にかけて日本に関する記載は、すべての王朝正史の中に見られる。（資料：武安隆・熊達雲『中国人の日本研究史』（六興出版社、1989年）、李玉『中国の日本研究』（『中国人の日本研究』2009年、法政大学国際日本研究センター編集））

明治維新まで、中国の日本研究は地理、風俗、古代史などについての記載が主であった。

日本は明治維新の後、積極的に西洋に学び、維新改革を実行し、急速に近代資本主義的発展の道を歩み始めた。1874年、李鴻章は皇帝に献上した上奏文の中で明治維新についての認識を述べている。彼は、日本が台湾を侵略したのは、明治維新後富国強兵に努めた結果だと認識し、また洋務派の立場から明治政府が積極的に西洋の軍事および工業技術を学び、加えて外貨の借款、留学生の派遣などの措置をとることに賛成した。しかし日本が政治制度および服装、歴法にいたるまで改革を進めることについては反対した。1871年に中日両国は「中日修好条約」に調印し、1877年に中国駐日公使館を設けた。それと同時に、留学生が日本に送られ（1901－1906年における留学生数は12,909人に上った）、多くの愛国の志士や学者も日本に赴いた。在日公使、参事官、随員、留学生、学者たちは詩録、述略、雑詠、見聞録、旅行記などたくさんの著書を書いただけでなく、日本の科学技術、教育、軍事、外交などに幅広く関心を持ち、勉強した。有名なものとして、王韜の『扶桑遊記』、程恩培の『日本変法次第類考』、黄遵憲の『日本国志』、康有為の『日本変政考』などが挙げられる。これらは、日本の人文風貌、歴史、教育、法律、官吏、政治社会改革などについて紹介しただけでなく、中国の維新変法をも考察した。その目的は日本の維新経験を学び、又は日本を経由して西洋のものを学んで、中国が富強となる道を探求することにあった。

辛亥革命から中華人民共和国の成立まではわずか30年あまりであるが、中国の対日観に根本的な転換が起きた。2007年にNHKでは「希望から失望へ」というタイトルで明治維新に対するアジア諸国の対日認識をドキュメンタリーにして放送している。その年は、ちょうど平和憲法施行60周年にあたった。内容は、中国の対日認識にも合致するのではないかと思う。

北京大学李玉教授は次のように書いている。「日清戦争（甲午戦争）、八カ国連合軍の中国侵略の後、中国の人々は、日本が表面的には孫文の革命派を支持するように装いながら、実際には密かに北洋軍閥と結び、各種の親日勢力を援助して、矛盾と混乱を引き起こし、中国革命に反対しようとする現実を目にすることとなった。とりわけ1915年に日本が提出した『二十一条要求』は、中国を破滅させるものであり、日本帝国主義による中国侵略が暴露されることとなったのである。このとき、人々は明治維新への憧れという美しい夢から目覚めた。そして、再度日本を認識し直し、日本帝国主義による中国侵略の本来の姿を見破り始めた。これにあわせて、中国人の日本観にも根本的な転換が生じたのである」。

1931年の満州事変（九一八事変）勃発から1945年まで、中日関係は敵対状態であった。この時期の日本研究においては、それまでの実績を踏まえ雑誌や研究著書が出版されたが、その目的は、日本帝国主義を研究し、中華民族の抗日戦争に役立てることにあった。

## 2 研究客体不在への批判

1945年までの中日関係史と関連して、中国の日本研究は、だいたい地理、歴史、風俗の紹介や明治維新に焦点を当てており、明治政府の維新に対しては、李鴻章のように批判と評価をする人もいたし、慎重に明治維新の真似をしようと思う人もいた。甲午戦争と日露戦争に日本が勝ったことは中国人にとってショックであった。清朝大臣である張之洞は、『勸学篇』を書いて、日本が西洋から工商や軍事を学んだゆえに強くなったことを強調し、維新派である康有為、梁啓超も日本留学の必要性や便利さを強調した。中国の政治変革、国力増強のために日本へ赴いた中国人は多かった。1896年からの日本への留学生は10年間に約5万人もいた。30年代まではすでに延べ人数が10万人にも達したといわれた。彼らは日本が西洋から学んだ知識に目標を定めた。その留学生活は国家、民族の運命にも関わっていた。留学又は政治亡命者の中には、良く知られている革命家の孫文、周恩来、廖承志、日本の陸軍学校を出た蒋介石、文化人の戴季陶、郭沫若、鲁迅、周作人など、枚挙にいとまが無いのである。

彼らの訪日の目的は、日本を客体として研究するためというより、日本から近代技術を学ぶためであった。日本は研



究対象としての客体から後退して、近代西洋研究（勉強）の近道か、窓口になったのである。西洋の知識は日本経由で中国へ伝わるようになった。

中国の首席で「知日家」といわれる戴季陶は1928年に『日本論』を書いた。この本はここ数年中国で再び高く評価されベストセラーとなった。彼は次のように書いている。日本社会に対する中国人の観察錯誤と判断錯誤は普遍的である。本当の日本を知らなかったので判断も間違いが多かった、と。

ところで、日本の「失われた10年」は、中日関係も「失われた10年」となり、両国関係は冷え込んだが、その時、日本はどんな国なのか、先輩たちはどう見たのか、という問題意識を持ちながら、清末から民国時代までの長期にわたり日本滞在経験があるエリートたちの書いた「日本」を読もうという学者がいた。彼は、それらを読んで見えてくる日本を書きたいと言い、16人を選び、その著書から日本を探した。文人エリートの書いた日本は感情的で情趣にあふれていたが、政治エリートの書いた日本は現実的で実務功利の傾向に傾いていた。やはり『日本論』以外には日本をはっきり説明できた著書がなかったのである。彼は、まとめた資料を本にしたが、その本には『看不透的日本』（分からない日本）という名をつけた（李兆忠、東方出版社、2006年）。

要するに、数万人の留学生や政治活動家がいなければ、清末民初における中国文化思想の現代的転向はないと言える。現代中国語の中の社会科学範疇の単語は70%程度が日本からの伝来であったと言われている。たとえば、幹部、政策、経済、社会、自由、自己意識、直覚、民法などである。漢籍に精通した日本の文人たちが漢字でもって西洋概念を日本に紹介したのであった。中国の文壇も半分は日本留学経験者で、日本から西洋文学や演劇を輸入した。近代化の遅れを取り戻したい中国にとって西洋の知識を求めるには「日本が手っ取り早い拠点」であった。錢鐘書は、西洋が遠いから日本の粗末加工した西洋のものを受け取る以外仕様がなないと話している（『猫』）。

中国人は、西洋には「大中華」と「大西洋」の二元的対立の感情で対応したのに対し、日本には「大中華」と「大西洋」との合流の感情で対応した（李兆忠）。「大中華」日本観にしろ、「大西洋」日本観にしろ、清末民初の中国は、あまり日本を独立した研究客体にしなかったのではないか。

## 二 「二分法」の日本、モデルの日本

### 1 「二分法」の日本認識

日本の戦争責任について、蒋介石も毛沢東も「一握りの軍国主義者」と「大多数の日本人民」とを分けて考えた。これは中国文化によるものなのか、蒋介石は「徳を持って怨みを報いる」といって、戦争賠償を放棄し、在留日本人や捕虜に対しても寛大政策をとった。東京裁判も「一握りの軍国主義者」以外には有罪判決を下さなかった。毛沢東は政権をとってから、日本について、「日本人民は偉大な民族である」と言っている。1972年の中日国交正常化の時に毛沢東と周恩来は対日賠償要求を放棄すると同時に、「一握りの軍国主義者」以外の一般の日本国民は戦争に対し責任を負うわけにはいかないと繰り返した。中国では「二分法」と言う言葉があるが、ここではこの言葉が使えた（若宮啓文教授）。この考えの下で、国交回復は中国では何も抵抗感がなかった。

この外交志向に導かれて日本は中国人の視野に戻った。日本の教育、日本映画、日本漢学者との交流、日本商品の輸入などが見られ、70年代半ばから80年代中は、特に日本ブームであった。中国人の視野に入った日本は、現代化のモデルであった。1979年の初め頃、鄧小平は日本を訪問し、新幹線に乗った彼は周りの随行者たちに日本の現代化を学ぼうと言った。同じ年の12月、大平正芳元首相は中国を訪れ、鄧小平に会った。大平は、日本の「所得倍増計画」などを紹介したのに対し、鄧小平は四倍増の改革開放目標をはじめて公開したのであった。今年はちょうど大平・鄧小平会見30周年に当たる。

### 2 モデル「日本」の研究

モデル「日本」についての研究は、その時期においてブームのように進められた。日本語が分かり大学の専門学科で教えている先生たちがリードして、日本研究が幅広く展開された。今まで積み重ねた知識や研究成果に基づき、研究著書が出版された。歴史と文学研究が多かった。日本語学科で勉強する学生が増えたので、日本語の教師の養成を急いだ。「大平学校」を開いて、5年連続で毎年120人の中国人日本語教師の集中養成を実施した。

しかし、この時期には、何より日本経済に関する研究が目立った。日本の財政政策、各時代の総合経済政策、産業政策、企業経営、農業政策と農協の運営、株式の持ち合い、メインバンク、企業集団と下請けなど、経済に関するすべてが調査研究の対象であった。研究はあまり批判が見えず、日本の経験を評価するものばかりであった。

中国の改革は計画経済からスタートしたものであったので、アメリカの経験より日本式の市場経済が参考モデルとして受け入れ易かった。政府の役割が大きいこと、経済政策が強調されること、個人より集団で行動すること、企業間の連帯関係を重視すること、終身雇用や年功序列など、日本式の社会主義と言われるほど、社会主義中国にとって真似し易かったように思われる。

ただ、経済学理論については、日本は自由経済を主張するのに対し、中国の学者はケインズやアダムスミス理論の中国への適用に賛成とはいえなかった。にもかかわらず、当時の日本はアメリカ式の原理主義的市場経済でもないし、中



国も硬直的な計画経済でもなかったもので、モデルの勉強は抵抗がなかった。

このような研究は、やっと日本を研究の客体として取り上げたのであった。研究成果は多かった。

### 三 冷静な日本研究へ

#### 1 バブル日本の研究

1992年に鄧小平は「南巡講話」を発表し、中国は市場経済の実施を宣言し、それ以降の中国は、日本との関係がもっと緊密になった。日本は対中投資が加速して、企業活動がますます盛んになった。しかし、日本経済はバブルの崩壊プロセスに入った。そのプロセスは長かった。本来何においても道筋がはっきりしていた日本は、バブルについてはいつも確かな話ができなかった。中国の研究者がたびたび日本調査をしたが、日本の学者よりアメリカからの分析や批判が聞こえてきた。日本研究は国際視野で取り上げられるようになった。経済と関連して、法整備を急いでいた中国は日本の法律を勉強すると同時にアメリカ法からの影響を受けるようになった。バブル崩壊後の日本では毎年のように法律の改正や特別法の設定などがあり、不安定のように見えたが、中国の会社法、契約法、物権法の起草も日本モデル、ドイツモデル、アメリカモデルの選択参考を辿った。

#### 2 和解と民族主義の日本の研究

若宮啓文教授は中日関係を「翌年の法則」と総括している。この比喻はいかにもあたっているのではないかと思う。即ち歴史問題について反省をしては、翌年になると必ず近隣諸国に不愉快な思いをさせる話をする。その度に、中国や韓国などは反発し、外交問題になり、首相が変わるとすぐ中国を訪問し反省の約束をするというような悪循環であった。若宮教授は、それを「和解と民族主義」の心情並存だと書かれた。ここ15年において日本では10人の首相が交替した。替わるたびに、中国では「今度の首相は中国の感情を理解してくれるか」と決まり文句のように聞かれた。

「同文同種」（私は賛成しないが）、「一衣帯水」と言われる近い関係なのに誤解が多く、お互いに「当たり前だ」と思うことは実は当たり前ではないということがたくさんあった。国と国との関係においてもっとも大切なのは信頼関係であって、特に国民の心と心の中に結ばれた強固な信頼である。「それがなく、一時的なムードや情緒的な親近感、さらには、経済上の利害の上に日中関係の諸局面を築き上げようとすれば、砂上の楼閣に似たはかなく、脆弱なものに終わるであろう」。これは大平正芳元首相の言葉である。

このような関係は、日本研究者を冷静にさせた。歴史学、国際関係論だけでなく、日本思想史、日本精神史、日本国民性、日本哲学、日本宗教、日本神道、日本社会史などに対する関心が高まった。アメリカ人学者の『菊と刀』も再びベストセラーになり、文化人類学の立場での研究が重視されている。小泉八雲、南博、加藤周一、丸山眞男、柳田国男、山本七平など日本人学者の書いた本も大量に翻訳されている。中国の学者が書いた研究著書は大量なものであって、研究が深いものが確かに少なくない。日本についての著書はほとんど冷静なもので、客観的な分析に努力しているようであるが、日本の中国に関する著書の雰囲気とは違う。本屋では中国に関する本は非常に多いが、冷静で学問的なものは少ないようである。私はいつも不思議に思うが、日本はどんな「中国」を読んでいるのであろうか。とにかく、中国の日本研究は、もう日本紹介の時代を超えて、分析研究時代、成人期に入ったと思う。

### 四 学科視野の日本研究と発展視野の日本研究

日本研究はすでに一国研究から国際視野へ、グローバル視野へ、情熱的な紹介から冷静な研究へ、経済や法律など応用研究から精神面の研究へと移り、広くて深層な研究が期待されている。

中国の研究学界では日本文化の研究を「日本学」と言うケースもある。国際研究における国別研究として日本研究を「日本学研究」と言う場合もある。しかし、グローバル化の中で、少なくとも、日本経済の研究については、日本学より、やはり国際経済、経済学に戻って初めて世界における日本経済が分かるのではないかと思う。この意味で、研究機関がどのような設置形態であっても、個人としての日本研究はそれぞれの学科において初めて発展が得られ、方法としての日本、思想としての日本、即ち真の日本研究がはじめて進められる。中国の日本研究はこの方向へ歩み始めた。

日本は転換期におかれている。即ち、ポスト成長期の日本はこれからの経済と社会のあり方について模索をする段階にある。バブル崩壊してから「失われた10年」、「失われた15年」、「失われた20年」にわたる試行錯誤を辿ってきた日本経済、社会のあり方、それを実現するための方策などを明らかにするためには、まだ時間がかかるかもしれない。日本は明治維新後もほぼ20年模索をして国家発展の方向が明確化されたのであったし、戦後も20年ほど経過して所得倍増の高度成長に定着したのであった。今回の転換期も明確な方向が見えるには20年ぐらいかかるであろうか。アジアにおいて、日本は相変わらずもっとも成熟した現代化国家である。明治維新でも戦後の高度成長でも、日本は世界に、特に東アジアに貴重な経験を提供した。今の日本の経験と教訓は相変わらずアジアの発展途上諸国にとって重要である。特に高度成長が終わる時期を必ず迎える中国にとって、もっとも良い参考にもなるに違いない。日本研究者として日本の発展を期待すると同時に、今の日本こそ研究の価値があるのではないかと思う。

LI Wei / Director, Institute of Japanese Studies, Chinese Academy of Social Sciences

The issue at hand: What makes Japan Japan?

For Chinese researchers, the questions of what Japan is and why it is that way are difficult issues that can never be completely studied; Japan becomes an even more inscrutable country when relations between Japan and China are not going well. I myself have avoided this difficult topic as much as possible.

Japanology in China has changed alongside Chinese perceptions of Japan in each era.

I. An object of learning, or an object of research?

1. From hope to despair as an object of learning

The earliest mentions of Japan in Chinese records can be found in the ancient geographical account *Shan Hai Jing* and in “Treatise on Geography” in the *Book of Han*, which describe Japan’s geographical location. The “Account of the People of Wa” in the *Book of Wei* (“Chronicles of the Eastern Barbarians” in the *Records of Three Kingdoms*) written by Chen Shou in AD 289 is the oldest documentation we have on the ancient history of Japan. Descriptions of Japan thereafter up through the Qing period can be found in all the official dynastic histories (references: Wu Anlong and Xiong Dayun, *A History of Chinese Research on Japan*, Rokko Shuppan, 1989; Li Yu, “Research on Japan in China” (*Chinese Research on Japan*, 2009, edited by Hosei University Research Center for International Japanese Studies)).

Until the Meiji Restoration, Japanology in China consisted primarily of descriptions of Japan’s geography, customs, ancient history and the like. Following the Meiji Restoration, Japan began actively learning from the West, undertaking restoration reforms, and began moving rapidly down the path of modern capitalistic development. In an 1874 address to the throne presented to the Chinese emperor, Li Hung Chang related his views on the Meiji Restoration. He contended that Japan had invaded Taiwan in the course of seeking a prosperous country and a strong military following the Meiji Restoration and, from his perspective as a member of the Self-Strengthening Movement, he supported the Meiji government’s measures to actively acquire military and industrial know-how from the West and to take out foreign loans and dispatch students abroad. He was opposed, however, to Japan going so far as to reform its political systems and even clothing and calendars. In 1871 China and Japan ratified the Japan-China Treaty of Amity, and in 1877 a Chinese legation was stationed in Japan. During this time, students were sent to study in Japan (with such students numbering 12,909 in the period 1901-1906), and many patriots and scholars also made their way to Japan. Chinese ministers to Japan, councilors and attendant staff, students and scholars resided in Japan authored poetry, memoirs, records of personal experiences, and travelogues, and studied a broad range of interests in Japan’s science and technology, education, military affairs, and diplomacy. Particularly famous among these works are Wang Tao’s *A Journey to Japan*, Cheng En pei’s *Riben Bianfa Cidi Leikao (Observations on Changes in Japanese Reform)*, Huang Zunxian’s *Riben Guozhi (Treatise on Japan)*, and Kang Youwei’s *Riben Bian Zheng Kao (A study of the institutional reforms in Japan)*. They introduced Japan’s cultural features, history, education, law, bureaucracy, and political and social reforms and inspired the Hundred Day’s Reform Movement. Their aims were to learn from Japan’s reform experiences and to acquire Western knowledge via Japan in order to help China down the path to becoming prosperous and strong.

During the mere 30 years or so from the Xinhai Revolution to the establishment of the People’s Republic of China, a radical transformation occurred in China’s view of Japan. This was described in NHK’s 2007 documentary “From Hope to Despair” on the views of Asian countries on the Meiji Restoration and Japan. That year marked the peace constitution’s 60th year in force. I believe the contents of the documentary also reflected China’s views on Japan.

According to Professor Li Yu of Beijing University, “After the First Sino-Japanese War and the invasion of China by an eight-nation coalition army, the people of China saw that Japan, while superficially claiming its support for the revolutionary faction of Sun Yat-sen, was in fact secretly collaborating with the Beiyang Army and providing assistance to various pro-Japan forces, resulting in contradictions and chaos. It became clear that Japan was in fact seeking to oppose the Xinhai Revolution. Above all the “Twenty-One Demands” presented by Japan in 1915 were designed to destroy China and exposed Japanese imperialism’s invasion of China. It was at this time that the Chinese people awoke from their beautiful dream of fascination with the Meiji Restoration. Their awareness of Japan changed again as they began to discern the true nature of the Japanese imperialists’ invasion of China, and a dramatic change occurred in Chinese views on Japan as a result.”



China and Japan were enemies from the 1931 Manchurian Incident (September 18 Incident) until 1945. Magazine articles and books based on previous research were published during this period, but the objective of Japanology throughout was to research Japanese imperialism in order to aid the Chinese people in their war of resistance against Japan.

## 2. Criticism of the absence of an object of research

Stemming from the history of Sino-Japanese relations up to 1945, Japanology in China generally focused on introducing Japan's geography, history, and customs and on analyzing the Meiji Restoration, with people such as Li Hongzhang both criticizing and commending the Meiji reforms and others advocating cautious imitation of these reforms. Japan's victories in the First Sino-Japanese War and the Russo-Japanese War came as a shock to the Chinese. In his *Exhortation to Learning*, Zhang Zhidong, a Qing official, asserted that Japan had become strong by acquiring industrial, commercial and military know-how from the West, and the reformists Kang Youwei and Liang Qichao also stressed the necessity and convenience of study in Japan. Many of the Chinese who traveled to Japan did so as a means of bringing about political reform in China and boosting the country's strength. Nearly 50,000 Chinese students went to Japan for study in the decade from 1896, and a total of 100,000 or more had done so by the 1930s. These students set their sights on knowledge learned by Japan from the West. Their lives as students were connected with the fates of their nation and their people. These students and political exiles included the well-known reformer Sun Yat-sen, Zhou Enlai, Liao Chengzhi, the Imperial Japanese Army Academy graduate Chiang Kai-shek, intellectuals such as Tai Chi-tao, Guo Moruo, Lu Xun, and Zhou Zuoren, and too many others to enumerate.

Their objective in visiting Japan was not so much to study Japan itself as to learn modern technology from Japan. Japan's importance as an object of research faded as it became a shortcut or gateway to research (study) of the modern West. Western knowledge was thus transmitted to China via Japan.

The Chinese premier Tai Chi-tao, said to be very familiar with Japan, in 1928 wrote *Ribenlun (Japanese studies)*, a book that in the past few years has become a highly-regarded bestseller in China. He wrote that the Chinese people have universally misperceived and misjudged Japanese society and that their lack of knowledge about the true Japan led them to make many errors of judgment.

On an aside, Japan's "Lost Decade" also became a "lost decade" for Sino-Japanese relations as ties between the two countries cooled. There was one scholar at the time, interested in what kind of country Japan is and how his predecessors had viewed it, who sought to read about the "Japan" described by elites who had been long-term residents in Japan between the end of the Qing Dynasty and the creation of the PRC. He selected 16 such persons and sought Japan from their works in order to write about the Japan that he had understood from reading them. The Japan that the cultural elites had presented was emotional and overflowing in sentiment, but the Japan that the political elites had discussed tended to be practical and utilitarian. He discovered, of course, that only *Ribenlun* offered a clear exposition on Japan. He compiled his research into a book entitled *Incomprehensible Japan* (Li Shiu Chung, Dongfang Chubanshe, 2006).

In essence, had not tens of thousands of Chinese students and political activists visited Japan, there would have been no modernization of Chinese culture and thought at the end of the Qing Dynasty and the start of the People's Republic. Approximately 70% of modern Chinese terminology in the social sciences is said to have originated in Japan; this includes, for example, the terms for executive, policy, economics, society, freedom, self-awareness, intuition, and civil law. Japanese writers well versed in Chinese writings used Chinese characters to introduce Western concepts into Japan. Half of China's literati studied in Japan, from which they imported Western literature and theater. Japan offered China a shortcut to Western knowledge as the Chinese endeavored to make up for lost time in their modernization. In his book *Cat*, Qian Zhongshu has declared that, with the West being so far away, the Chinese had little choice but to accept Western things crudely processed by Japan.

The Chinese people responded to the West based on a dualistic confrontation between Great China and West, while they responded to Japan in the spirit of a confluence between Great China and West (Li Shiu Chung). Whether it be the Great Chinese view of Japan or the Western view of Japan, I think that China at the end of the Qing Dynasty and the early years of the Republic did not give much consideration to Japan as an independent object of research.



## II. Japan as a dichotomy, Japan as a model

### 1. The view of Japan as a dichotomy

With regard to Japan's responsibility for the war, both Chiang Kai-shek and Mao Zedong distinguished between the handful of militarists and the vast majority of the Japanese people. Perhaps due to the influence of Chinese culture, Chiang Kai-shek waived war reparations - "Repay hate with virtue" - and adopted a generous policy toward Japanese resident in China and prisoners of war. The Tokyo Military Tribunals also handed down guilty verdicts only to "a handful of militarists." From the time he took power, Mao Zedong said in reference to Japan that "the Japanese people are a great people." During the normalization of diplomatic relations between China and Japan in 1972, Mao Zedong and Zhou Enlai waived demands for reparations from Japan and repeatedly stated that would not be right to place responsibility for a war launched by "a handful of militarists" on the Japanese populace as a whole. Professor Yoshibumi Wakamiya has said that the Chinese term "erfen fa" (dichotomy) is applicable here. With this approach, there was no resistance at all in China to the restoration of diplomatic relations.

Guided by this diplomatic orientation, Japan reappeared within the Chinese field of view. Interest rose in Japanese education and Japanese movies, exchanges took place with Japanese scholars of Chinese literature, and Japanese products began to be imported, with the mid-1970s through the 1980s in particular seeing a "Japan boom." As it returned to the Chinese field of view, Japan became a model of modernization. In early 1979 Deng Xiaoping visited Japan and, after riding the shinkansen, instructed his delegation to learn more about Japan's modernization. In December of that same year, former Prime Minister Masayoshi Ohira visited China and met with Deng Xiaoping. Ohira briefed him on Japan's "income doubling plan," and Deng responded by publicly announcing for the first time China's target of a fourfold increase in income through its reform and opening efforts. 2009 marks the 30th anniversary of the Ohira/Deng press conference.

### 2. Research on Japan as a model

Research on Japan as a model surged ahead during this time. Japanology developed along a broad front, led by university instructors in specialist departments competent in the Japanese language. Books were published on the knowledge and research results accumulated to that point, and much research was conducted on Japanese history and literature. The growing number of students studying in Japanese language departments made it urgent that Japanese language instructors be trained. The "Ohira School" was opened and, for five consecutive years, 120 Chinese instructors in the Japanese language underwent intensive training each year. Dominant during this period, however, was research on the Japanese economy. Research studies covered a full range of economic issues, including Japan's fiscal policies, comprehensive economic policies in different eras, industrial policies, corporate management, agricultural policies and operation of agricultural cooperatives, cross-shareholding, main financing banks, and subcontracting with corporate groups. Little criticism could be found in this research, which did nothing but praise the Japanese experience.

Because its reforms were premised on a planned economy, China more readily accepted Japan's market economy as a model than the US' experience. With government playing a large role in Japan's economy, with economic policies operated in union, with people acting more in groups than as individuals, with importance given to connectedness between companies, and with lifelong employment and seniority systems commonplace - so much so that reference was often made to "Japanese-style socialism" - Japan was thought an easier model for socialist China to imitate.

With regard to economic theory, however, Chinese academics could not be said to have been in agreement with their Japanese counterparts' support for liberal economics or with the application of Keynes' or Adam Smith's theories to China. Nevertheless, as Japan was not characterized by American-style market fundamentalism and China did not have a rigid planned economy, there was no opposition to studying Japan as a model.

Thus Japan at last became an object of research in and of itself, and this research proved very fruitful.

## III. Toward dispassionate Japanology

### 1. Research on Japan's bubble economy

In 1992 Deng Xiaoping went on his "southern speaking tour" and China declared that it would be moving to a market economy, and ties between China and Japan have grown closer ever since. Japanese investment in China picked up and corporate activity gained momentum. Not long after, though, Japan's bubble economy began to collapse, a process that took quite some time. Japan had always set out a definite course in regard



to all manner of things, but it was unable to determine a precise way out of the bubble bursting. Chinese researchers frequently conducted surveys of Japan but they were more likely to hear analysis and criticism from the US than from Japanese scholars, and Japanology began to be approached from a more international perspective. Urgently needing to put in place legislation pertaining to the economy, China was studying Japanese law while at the same time coming under the influence of US law. In the wake of the bubble collapse, Japan revised existing laws and established new special laws on nearly an annual basis, giving the appearance of instability, and Chinese drafters of company, contract, and property law picked and chose from among the models offered by Japan, Germany and the US.

## 2. Research on a Japan of reconciliation and nationalism

Professor Yoshiyuki Wakamiya has characterized Sino-Japanese relations as subject to “the next-year rule,” a figure of speech that I think is extremely apt. In other words, Japan reflects on historical issues this year, and the next year will inevitably see Japan say something that will displease its neighbors. This triggers a vicious cycle in which China, South Korea and others voice their objections, the matter develops into a diplomatic issue and, with every change of government, the new prime minister visits China and promises to reflect on Japan’s past conduct. Professor Wakamiya called this the co-existence of “reconciliation and nationalism.” Over the past 15 years, Japan has changed prime ministers 10 times, and each time the Chinese have formulaically asked, “Will this prime minister understand Chinese sentiment?”

Despite having close ties - “same race, same script” (an idea with which I do not agree) and “being neighbors separated by a narrow strip of water” - China and Japan have many misunderstandings, and there are many matters taken for granted by each that should not in fact be taken for granted. Trust is the most important aspect of relations between countries, especially a solid sense of trust connecting their two peoples. Masayoshi Ohira said, “Without that, building the various facets of Sino-Japanese relations based on a temporary mood, an emotional affinity or economic interests is essential building a house of cards that will prove very fragile.”

This kind of relationship has kept Japanologists dispassionate. They have shown great interest not only in history and international relations, but also in such areas as the history of Japanese thought, Japanese intellectual history, the Japanese national character, Japanese philosophy, Japanese religion, Shinto, and Japanese social history. “The Chrysanthemum and the Sword,” written by an American anthropologist, has again become a bestseller, and a new emphasis has been given to research from the standpoint of cultural anthropology. A considerable number of books by Japanese scholars such as Yakumo Koizumi, Hiroshi Minami, Shuichi Kato, Masao Maruyama, Kunio Yanagita and Shichihei Yamamoto have been translated. A good number of research works have also been written by Chinese scholars, not a few of which exhibit in-depth research. Books on Japan are almost always detached in tone, with efforts made as far as possible to analyze Japan objectively, unlike with books about China written in Japan. Bookstores in Japan contain a great many books about China, but few of them appear to be unemotional and academic in nature. I am always fascinated by the kinds of “China” the Japanese are reading about. In any case, Japanology in China has already transcended the era of introducing Japan and is now in a mature era of analytically researching it.

## IV. Japanology from an academic perspective and from a development perspective

Japanology has already made the transition from research on a single country to an international perspective and a global perspective, from an emotional introduction to cool-headed research, from practical research in economics and law to research on intellectual matters, and we can expect to see broad and in-depth research.

Among Chinese researchers, there are instances in which research on Japanese culture is termed “Japanese studies.” Japanology is also at times referred to as “Japanese studies research” in the context of country-specific research in international studies. With regard at least to research on the Japanese economy in the midst of globalization, I think that it is reverting to international economics and economic theory gives one a better understanding of the Japanese economy in a global context that does Japanese studies. In that sense, regardless of the setting of research institutes, progress can only be made by individual Japanologists in their respective academic fields; it is only with Japan as a method, Japan as a school of thought, that genuine Japanology can be pursued. Japanology in China has begun to move in this direction. Japan is now in a transition period, a post-growth phase in which it is looking for the best approaches to adopt for the future of its economy and society. It will perhaps take still more time before the optimal



approaches and the measures for realizing them can be determined for a Japanese economy and society that went through trial-and-error during the “lost decade,” the “lost decade-and-a-half” and even the “lost two decades” after the collapse of the bubble economy. Japan was also in search of a direction for its national development for about 20 years following the Meiji Restoration, and it took Japan about 20 years after World War II to achieve a doubling of incomes and rapid growth. The current transition period, too, will likely last about 20 years before a clear path ahead become visible. Japan remains the most mature modernized nation in Asia. Japan’s experiences during the Meiji reforms and during its postwar rapid growth offered valuable lessons for the rest of the world, particularly East Asia, and Japan’s current experiences and the lessons to be drawn therefrom remain important for Asia’s developing countries. In particular, Japan will undoubtedly serve as the best reference for China, which will inevitably reach a point where its rapid growth will come to an end. As a Japanologist, I anticipate further development in Japan and I think that Japan at this very moment is one worthy of research.



## 基調講演 1

### 中国の日本研究－日本認識と関連する日本研究



李 薇（中国社会科学院日本研究所所長）

<本稿を作成するにあたり、人名への敬称は省略しました。>

李薇と申します。中国社会科学院から来ました。

私がいただいたテーマは、中国の日本研究です。今日の中国人の日本認識は、ずっと昔からの延長線上にあるのではないかと思います。その認識によって日本研究が進められてきたのではないかと考えておりますので、今日はこの筋を踏まえてお話をさせていただきたいと思えます。

私は、20年ほど、ずっと同じような問題意識を持ってきました。それは「日本は何を以って日本なのか」ということです。中国社会科学院には、日本研究所の設置と同じ時期にアメリカ研究所も設けられました。ヨーロッパ研究所もあります。国を対象とする研究所は、日本とアメリカの二つしかありません。研究の目的は、ヨーロッパ研究所はやはり「ヨーロッパは何を以ってヨーロッパなのか」を知ることにあります。日本研究所も同じような問いを持っております。

中国の研究者にとって、「日本は何を以って日本なのか」は研究し尽くせない難問です。特に両国関係がうまくいかないときには、日本はもっと分からない国となります。私もできるだけこの難しい宿題を避けてきました。

#### 一 学ぶ客体なのか、研究客体なのか

##### 1 学ぶ客体に対する希望から失望、敵対へ

中国の最も早い日本に関する記述は、日本の地理的な場所が記載されている古代の地理書『山海経』や『漢書・地理志』です。陳寿が記した『魏志倭人伝』は、日本古代史に関する最古の資料です。また、清朝時代にかけて、日本に関する記載が、王朝正史の中に見られます。

明治維新以降、本当の意味での日本認識が盛んになりました。明治維新から1945年の日本の敗戦まで、中国の日本認識は概ね3段階に分けられます。第1段階では、明治維新で成功した日本に対して中国人は非常に希望を持っていました。それから1915年の「二十一か条要求」前後、中国人は日本に対して強く反発し、失望しました。これが第2段階です。その後、満州事変が起こり、まったく敵対状態になりました。希望から失望へ、それから敵対というような、中国と日本の関係でした。

##### 希望の時代

明治維新の後、積極的に西洋に学び、維新改革を実行し、急速に近代資本主義的発展の道を歩み始めた日本を、中国はどのように認識していたのか。1874年に中国の大臣李鴻章は、皇帝に献上した上奏文

の中で明治維新についての認識を述べました。彼は、日本が台湾を侵略したのは、明治維新後富国強兵に努めた結果だと認識し、また洋務派の立場から明治政府が積極的に西洋の軍事および工業技術を学び、加えて外貨の借款、留学生の派遣などの措置をとることに賛成しました。しかし、日本が政治制度および服装、歴法にいたるまで改革を進めることについては反対しました。

と言うのは、清末に日本の明治維新と同じように中国でも維新をやろうとしたのです。しかし、明治維新では政治的構造が変わりましたが、中国の維新派は政治構造を変えず、清朝の政治的な枠組みをそのまま守りながら内部で維新改革をすることを目指しました。もちろん、これは失敗に終わりました。

1871年に中日両国は「中日修好条約」に調印し、1877年に中国駐日公使館を設けました。同時に留学生が送られ、多くの愛国の志士や学者も日本に赴きました。留学生や学者、在日公使館の公使・参事官・随員たちは、見聞録や旅行記など、日本を紹介する本をたくさん書いてだけでなく、日本の科学技術、教育、軍事、外交などに幅広く関心を持ち、勉強しました。

有名な本として、王韜の『扶桑遊紀』、程恩培の『日本変法次第類考』、黄遵憲の『日本国志』、維新派の康有為の『日本変政考』などが挙げられます。これらは、日本の人文風貌、歴史、教育、法律、官吏、政治社会改革などについて紹介しただけでなく、中国の維新変法をも考察しました。その目的はやはり日本の維新経験を学び、または日本を経由して西洋のものを学んで、中国が富強となる道を探求するためでした。今でも中国の第一歴史档案馆に当時の非常に簡単な新聞がありますが、その中でも、日本についていろいろ書かれています。日本を学ぼうと、日本に対して非常に希望を持っていた時代でした。

## 失望の時代

辛亥革命から中華人民共和国成立までの30年あまり、中国の対日観は非常に複雑でした。私は2007年にちょうど東京におりまして、テレビでNHKのドキュメンタリーを見ました。タイトルは「希望から失望へ」というもので、明治維新に関するアジア諸国の対日認識をドキュメンタリーにして放送してありました。その年はちょうど平和憲法施行60周年にあたりました。

その番組によれば、中国と同じようにベトナムやインドなどでも、日本が日露戦争で勝ち、アジア諸国がやっと西洋に勝つことができた、非常に日本に感動しました。日露戦争では、中国の旅順も戦場となり、日本軍とロシア軍はずいぶん死者を出し、現地の住民たちもずいぶん被害を受けました。にもかかわらず中国の一部のインテリたちは「やっとアジア人が西洋に勝つことができた」と、そのときはまだ感動の段階で、非常に希望を持っていました。

しかし、そのあとの日本の歩みに、アジア諸国は本当に失望しました。北京大学教授で日本研究者の、李玉は次のように書いておられます。「日清戦争（甲午戦争）、八カ国連合軍の中国侵略の後、中国の人々は、日本が表面的には孫文の革命派を支持するように装いながら、実際には密かに北洋軍閥と結び、各種の親日勢力を援助して、矛盾と混乱を引き起こし、中国革命に反対しようとする現実を目にすることとなった。とりわけ1915年に日本が提出した『二十一か条要求』は、中国を破滅させるものであり、日本帝国主義による中国侵略が暴露されることとなったのである。このとき、人々は明治維新の憧れという美しい夢から目覚めた。そして、再度日本を認識し直し、日本帝国主義による中国侵略の本来の姿を見破り始めた。これにあわせて、中国人の日本観にも根本的な転換が生じたのである」。

## 敵対時代

1931年の満州事変勃発から1945年まで、中日関係は敵対状態でした。この時期の日本研究において、今までの実績を踏まえ雑誌や研究著書が出版されましたが、その目的は日本帝国主義を研究し、中華民

族の抗日戦争に役立てることにありました。

今年是中国建国60周年にあたります。最近、中国でも客観的に建国の歩みを振り返ったテレビ番組の放送がありました。また、歴史テレビドラマ、特に近代史に関するテレビドラマもずいぶん放送されました。清末から日本の明治維新を見て、中国人は自分の国をどう強めるか、試行錯誤をしましたが、その内容もテレビドラマになりました。その中には、日本との付き合い、日本への留学、日本への政治亡命、日本との交渉、二十一か条要求、満州事変、軍閥と日本軍のつながり、盧溝橋事件によって国民党と共産党が連携し対日戦争に突入したことなど、このような筋を辿ったさまざまなテレビの放送がありました。

この頃、駐中国日本大使館の知り合いから、「どうして最近、中国のテレビで日本の悪口、昔の侵略のことなどをたくさん放送しているのでしょうか」と聞かれました。

私が考えるに、1945年から明治維新までさかのぼった100年間ほどの中国の近代史の中で、重大な事件は、すべて日本と関係がありました。日本とのつながりを言わずに、中国の近代史を語ることはできません。大使館の方はいい気持がしなかったのですが、近代史に触れると、どうしても記憶として不愉快なことが出てきてしまうのだと思います。

## 2 研究客体不在への批判

希望から失望、そして敵対の日本認識のもとで、中国の日本研究はどういうふうに進められてきたかと言いますと、「研究客体の不在」と私は認識しております。つまり、日本を研究の客体として受け取ったのではなくて、最初は学ぶモデル、それから失望モデル、失望の相手、敵対の相手として見てきたのです。

1945年までの中日関係史と関連して、中国の日本研究は、だいたい地理、歴史、風俗の紹介から明治維新に焦点を当てており、明治維新に対しては李鴻章のように批判と評価をする人もいたし、慎重に明治維新の真似をしようとする人もいました。甲午戦争と日露戦争に日本が勝ったことは、中国人にとってショックでした。清朝の大臣である張之洞は『勸学篇』を書いて、日本が西洋から工商や軍事を学んだゆえに強くなったことを強調し、維新派である康有為、梁啓超も日本留学の必要性や利便性を強調しました。多くの中国人が、中国の政治変革、国力増強のために日本へ赴きました。

1896年からの日本への留学生は、10年間に約5万人もおりました。1930年代までには、延べ人数がすでに10万人にも達したといわれております。彼らは、日本が西洋から学んだ知識に目標を定めました。その留学生活は国家、民族の運命にもかかわっておりました。

留学または政治亡命者の中には、よく知られている革命家の孫文、周恩来、早稲田大学を卒業した廖承志、日本の陸軍学校を出た蒋介石などがいました。1910年代の国民党の軍閥のトップたちもほとんどが日本の陸軍学校を出ました。その他にも、有名な文化人の戴季陶、郭沫若、魯迅、周作人など、枚挙にいとまがないほど多くいます。

彼らの訪日の目的は、日本を客体として研究するためというよりは、日本から近代技術を学ぶためでした。日本は研究対象としての客体から後退して、近代西洋研究の近道か窓口になったのです。西洋の知識は日本経由で中国へ伝わるようになりました。

中国の主席で知日家と言われる戴季陶は、1928年に『日本論』という本を書きました。この本はここ数年中国で再び高く評価され、今ベストセラーとなっております。彼は次のように書いております。「日本社会に対する中国人の観察錯誤と判断錯誤は普遍的である。本当の日本を知らなかったので判断

の間違が多かった」。

数年前、中日両国関係が冷え込んだとき、日本はどんな国なのか、先輩たちは日本をどう見たのかという問題意識を持ちながら、清末から民国時代までの長期にわたり日本滞在経験がある中国のエリートたちの書いた「日本」を読もうという学者がおりました。中国社会科学院の学者で私の友人ですが、彼は私に相談に来て、「最近そういう本を探しておまして、読んで分かった日本を書きたい。日本が分からない。昔のエリートの先生たち、先輩たちは長期滞在したので、彼らの目でどういう日本を見たのか、それをまとめて本にしたい」と言いました。彼は16人を選び、その著書から日本を探しました。

文人やエリートが書いた日本は、非常に感情的で情緒にあふれておりましたが、政治エリートが書いた日本は現実的で、実務功利の傾向に傾いておりました。やはり戴季陶の『日本論』以外には、日本をはっきり説明できた本はありませんでした。彼はまとめた資料を本にしましたが、『分かった日本』ではなく『分からない日本』というタイトルで出版しました。

私は彼の本を読みました。郭沫若は十数年くらい東京などに滞在し、日本人の奥さんをつらい、子どもを5人ほどつくりました。しかし、彼は日本はどういうものなのか、日本の国民性はどうか、日本については一切書いておりません。大変有名な魯迅も仙台に留学しました。魯迅も日本の風景や、日本は清潔であること、人情にあふれていることなどを書いておられます。『藤野先生』という小説も書いています。しかし、魯迅の日本認識は何なのか、はっきりは分かりません。

要するに、数万人の留学生や政治活動家がいなければ、清末民初における中国文化思想の現代的転向はないと言えます。彼らは、日本経由で西洋のもの、新しいもの、近代的なものを勉強しようとしてきました。日本で翻訳された西洋のもの、あるいは近代的な概念を中国まで伝えたのです。現代中国語の社会科学範疇の単語は、70%くらいが日本からの伝来であると言われております。例えば、幹部、政策、経済、社会、自由、自己意識、直覚、民法などが挙げられます。漢籍に精通した日本の文人たちが、漢字で西洋の概念を日本に紹介したのです。それを留学生たちが中国に伝えました。中国の文壇も半分は日本留学経験者で、日本から西洋文学や演劇を輸入しました。中国の話劇は、日本の演劇に影響を受けて起りました。

近代化の遅れを取り戻したい中国にとって、西洋の知識を求めるには「日本が手っ取り早い拠点」でした。中国の有名な文学者、錢鐘書は「西洋が遠いから日本の粗末加工した西洋のものを受け取る以外しようがない」と話しています。これが当時の中国の日本研究です。

中国人はなぜ当時、日本を客体にしなかったのでしょうか。つまり、日本経由で西洋のものを勉強し、日本そのものは研究の対象としなかった、客体にしなかった原因は何でしょうか。中国人は、西洋には「大中華」と「大西洋」の二元的対立の感情を持っておりました。中国は非常に独立した世界です。何でも自分でそれなりのものを持っています。西洋もそれなりのものを持っています。日本について、「昔、日本は中国から学んだではないか。日本を学ぶ、研究する必要はないではないか」と考えたかもしれません。ただ先進的な技術、軍事というものは日本に学びたい。魯迅は医学、郭沫若は日本に長期滞在したけれども西洋文学を研究しました。日本に対して中国人は「大中華」と「大西洋」との合流の感情で対応したのです。とにかく「大中華」の日本観にしても「大西洋」の日本観にしても、清末民初の中国はあまり日本を独立した研究客体にしなかったのではないかと思います。

## 二 「二分法」の日本、モデルの日本

### 1 「二分法」の日本認識

1945年の終戦のとき、中国はどういうふうに見たかと言いますと、私は「二分法の日本認識」と挙げております。日本の戦争責任について、蒋介石も毛沢東も、一握りの軍国主義者と大多数の日本人とを分けて考えておりました。これは中国文化によるものなのか、蒋介石は「徳を持って怨みを報いる」と言って戦争賠償を放棄し、在留日本人や捕虜に対しても非常に寛大な政策をとったと言われております。東京裁判も「一握りの軍国主義者」以外には有罪判決を下しませんでした。

毛沢東は政権をとってから、日本について、「日本人民は偉大な民族である」と言っております。私が日本語を勉強し始めたときに覚えた日本語も、「日本人民は偉大な民族である」です。これは「は～です」「は～である」という文法を教える先生が、まずこの文を覚えてくれたのです。

1972年の中日国交正常化のときに、毛沢東と周恩来は、対日賠償要求を放棄すると同時に、「一握りの軍国主義者」以外の一般の日本国民は、戦争に対して責任を負うわけにはいかないと繰り返しました。中国には「二分法」という言葉がありますが、ここではこの言葉を使えませんでした。これは日本の若宮啓文も本の中で同じく書いております。この考えのもとで、国交回復は中国では何も抵抗感がありませんでした。ちょうど私は日本語を勉強していた頃でこの身で感じたのですが、抵抗感は本当にありませんでした。皆喜んでおりました。

この外交志向に導かれて日本は中国人の視野に戻りました。日本語教育、日本映画、日本漢学者との交流、日本商品の中国への輸入が見られ、1970年代半ばから80年代は特に日本ブームでした。中国人の視野に入った日本は、現代化の日本モデルでした。1979年の初め頃、鄧小平は日本を訪問し、新幹線に乗りました。今でも記録映画が残っています。2008年は改革開放30周年にあたりましたが、テレビでこの記録映画がもう一度放送され、私は鄧小平が新幹線に乗って非常に興味深く周りの人に話をしている様子を見ました。彼は周りの随行者たちに「日本の現代化を学ぼう」と言いました。

同じ年の12月、当時日本の首相だった大平正芳は中国を訪れ、人民大会堂で鄧小平に会いました。その当時通訳を担当した黄華元、『鄧小平年譜』を書いている冷容は次のように証言しています。会談のとき、大平正芳は日本の所得倍増計画のことを鄧小平に紹介しました。それを聞いて、鄧小平は考えた。そして大平正芳に「あなたの中国改革の目標は何でしょうか」と聞かれ、少し黙って考えたあと「20年後の今世紀末までに国民の所得を4倍にする」という目標を話しました。4倍増の改革開放目標を初めて公表したのです。今年ちょうど大平・鄧小平会見30周年にあたります。つい最近、中国の日本学センターで大平正芳を記念するシンポジウムが開かれ、この話も非常に話題になりました。

### 2 モデル日本の研究

モデル「日本」についての研究は、その時期においてブームのように進められました。日本語が分かり、大学の専門学科で教えている先生たちがリードして、日本研究が幅広く展開されました。今まで積み重ねた知識や研究成果にもとづき、研究著書が出版されました。当時多かったのは歴史と文学研究です。

日本語科目で勉強する学生が急速に増えましたので、日本語教師の養成を急ぎました。大平正芳の中国への文化援助として「大平学校」があります。本当の名前は日本語教師養成学校ですが、皆、大平学校と言っております。大平学校を開いて、5年連続で毎年120人の中国人の日本語教師の集中養成を実

施しました。私は非常に幸せで、大平学校の第1期生でした。非常にそれを自慢しております。

しかし、この時期には何より日本経済に関する研究が目立ちました。日本の財政政策、各時代の総合経済政策、産業政策、企業経営、農業政策と農協のやり方、株式の持ち合い、メインバンク、企業集団と下請けなど、日本経済に関するすべてが調査研究の対象でした。研究ではあまり批判が見えず、日本の経験を評価するものばかりでした。

私もその時期に日本長期信用銀行の調査部に行きました。中国の改革は計画経済からスタートしたものであったので、アメリカの経験より日本式の市場経済のほうが参考モデルとして受け入れやすかったです。政府の役割が大きいこと、経済政策が強調されること、個人より集団で行動すること、企業間の連帯関係を重要視すること、終身雇用や年功序列など、いかにも当時の中国と非常に似ているところがあります。日本式の社会主義と言われるほど、社会主義中国にとって真似をしやすかったように思います。

ただ経済学の理論については、日本は自由主義経済を主張するのに対し、中国の学者たちは、ケインズやアダム・スミスの理論の中国への運用に賛成とは言えませんでした。にもかかわらず、当時の日本はアメリカ式の原理主義市場経済でもなかったし、ソ連のような硬直的な計画経済でもなかったので、モデルの勉強として抵抗はありませんでした。

このように、中国はやっと日本を研究の客体として取り上げました。研究の成果も非常に多かったです。日本の経済について書いた本もたくさんあります。ただ、紹介の本が非常に多かった。

### 三 冷静な日本研究へ

#### 1 バブル日本の研究

バブルのあと、今度は冷静な日本研究に転向しました。

1992年に鄧小平は深圳を視察し、南巡講話を発表しました。中国は市場経済の実施を宣言したのです。そのあと、中国と日本の関係はより緊密になり、日本は対中投資が加速し、企業活動がますます盛んになりました。

しかし、日本経済はバブルの崩壊プロセスに入ったのです。そのプロセスは非常に長かった。本来、日本は何においても道筋がはっきりしておりました。その日本が、バブルについてはいつもの確な話ができませんでした。中国の研究者がたびたび日本調査をしましたが、日本の学者からより、むしろアメリカからの日本に対する分析や批判というものが、非常に多く中国に伝わりました。

私は1995年から2005年まで10年間にわたって、中国社会科学院副院長で経済学者の王洛林、同科学院世界政治経済研究所所長の余永定と3人でバブル崩壊後の日本経済について調査しました。日本に来て、最初は不良債権がどれくらいあるかを調べましたが、来るたびにその数字が違うだけでなく、訪問先の機関が違っていると回答も違うのです。どうも不良債権の数字がわからない。

私は書店で、日本の経済学者たちはどのようにバブル崩壊を見ているか、新しい著書はどういうものなのか、探してもみましたが、その10年間は非常に静かでした。

そのときから、日本経済の研究、日本の体制の研究については、国際視野で取り上げるようになりました。経済と関連して法整備を急いでいた中国は、日本の法律を勉強すると同時に、アメリカ法からの影響も受けるようになりました。バブル崩壊後の日本では、毎年のように法律の改正や特別法の成立があり不安定に見えました。中国の会社法、契約法、物権法の起草も、日本モデル、ドイツモデル、アメ

リカモデルの選択参考を辿りました。

私は専門としては法律を勉強したのですが、私の知っている中国社会科学院法学研究所の専門家たちは、中国の改革開放体制後の30年間の法整備に非常に貢献しました。私は彼らの通訳としてたびたび日本に来ておりましたが、同じ大陸法ですので日本のものは非常に勉強しやすかった。

清末の清朝の改革のときに、明治維新後の日本の法整備を学ぼうと日本人の先生を招き、清朝政府内部で法律の塾のような場をつくりました。清末の法律の起草は日本人の指導のもとでつくったのです。辛亥革命によって実行できなかったのですが、また1930年代になって、やはり日本の法律を参考にして中華民法典などがつくられました。今でも台湾で使っております。

中華人民共和国ができたとき、ソ連の影響により、国民政府当時の法律は、一切認められませんでした。しかし、改革開放政策をはじめた1970年代末から特に80年代、もう一度法整備をやろうと、中華民法典や日本民法典などを参考にしました。日本の法律の調査のために、たびたびミッションを日本に派遣しました。しかし、中国は改革の道を辿っており、体制の変動が激しいので、定着しない段階ではなかなか法律の案を決められません。その最中に日本でバブルが崩壊したのです。そこで、すべてにおいて日本の法律の真似をするより、アメリカ的なものをもう少し参考にすべきではないかということになりました。またアメリカへの留学生が法律を勉強して中国に帰って来たので、法律起草の担当機関内部でも、激しく論争されました。例えば物権法の草案をつくる際、アメリカ法を勉強して帰ってきた人たちは、「物権法なんて。財産法にしましょう」と、概念でも論争しておりました。

バブル崩壊後の日本は非常に不安定な状態にあったので、中国の日本認識は、モデルというより問題「日本」というふうにも見るようになりました。同時に、その時期に両国の関係もうまくいなくなっておりました。

## 2 和解と民族主義の日本の研究

若宮啓文は、当時の中日関係を「翌年の法則」と総括しております。この比喻はいかにもあたっていると私は思っています。すなわち歴史問題について反省をしては、翌年になると必ず近隣諸国に不愉快な思いをさせる話をする。そのたびに中国や韓国などは反発し、外交問題になり、首相が変わるとすぐ中国を訪問して反省の約束をするというような悪循環でした。若宮啓文はそれを「和解と民主主義」の心情並存だと書いております。

ここ15年において、日本では10人の首相が交替しました。鳩山首相を入れますと11人目だと思いますが、変わるたびに中国では「今度の日本の首相は中国の感情を理解してくれるでしょうか」と私たちに聞いてくるのです。私たちは、いわゆる日本研究者ですけれども、非常につらいです。聞かれてもなかなか答えられません。

中日は、「同文同種」「一衣帯水」と言われる近い関係ですが非常に誤解が多く、お互いに「当たり前だ」と思うことは実は当たり前ではないということがたくさんありました。国と国との関係において、最も大切なのは信頼関係です。特に国民の心と心の中に結ばれた強固な信頼関係です。「それがなく、一時的なムードや情緒的な親近感、さらには経済上の利害の上に日中関係の諸局面を築き上げようとするれば、砂上の楼閣に似たはかなく脆弱なものに終わるであろう」。これは、1979年に大平正芳が言った言葉です。

このような関係は日本研究者を冷静にさせました。歴史学、国際関係論だけでなく、日本思想史、日本精神史、日本国民性、日本哲学、日本宗教、日本神道、日本社会史などに対する関心が高まりました。

アメリカの学者の『菊と刀』も再びベストセラーになり、文化人類学の立場での日本研究が重要視されており、著名な日本の学者たちが書いた日本に関する本も大量に中国語に翻訳されており、中国の学者が書いた日本研究の著書も増えてきております。

中国では、日本についての著書は、だんだん冷静になってきて、客観的な分析に努力しているように思います。中国で書店に行きますと、昔は日本経済の本ばかりでしたが、最近は日本の文化、神道、特に精神面についての分析の本、日本人が書いた本、西洋人が書いた日本の本、江戸時代の徳川幕府について書いた本、源氏物語の翻訳など、たくさん並んでいます。それに対して、逆に日本では、書店に並んでいる中国の本はどうも客観的なものが少ないように見えます。日本の中国研究に比べ、中国の日本研究はインテリの間では冷静になっていると思います。

## 四 学科視野の日本研究と発展視野の日本研究

### 1 伝統学科における日本研究

現在、中国の日本研究がどういう体制になっているかと言いますと、だいたい3種類に分けられます。一つは伝統学科における日本研究。主に外国文学としての日本文学の研究、世界史としての日本史の研究、中国近代史研究としての中外関係史研究における日本研究などがあります。

これらの研究は、1950年代から大学や研究機関において展開されてきました。例えば北京大学とか南海大学、復旦大学、中国社会科学院の外国文学研究所、世界史研究所、近代史研究所などが挙げられます。また、ここ20年ほど、経済学、法学、社会学、政治学、言語学などの学科では日本学界との交流が頻繁に行われておりまして、学科分野の日本研究が行われております。

これは伝統学科の内部の日本研究です。伝統学科では日本研究者の人数は少ないですが、知識論や方法論の伝統があり、学科としての累積と学術的な資源の蓄積がありますので、深みがあってしっかりしていると思います。

### 2 独立学科としての「日本学」研究

二つ目は独立学科としての「日本学」の研究です。「日本学」という言葉は日本ではないかもしれませんが、しかし、国際交流基金が中国で日本学センターをつくりましたので、「日本学」として中国は受け入れております。「日本学」の概念は高度成長期の日本で生まれたと思います。アメリカの「アメリカ学」は、1930年代からアメリカ人が自らの文化の特性や地位を探求する中で徐々に形成してきました。どちらも最初は歴史と文学の総合研究からスタートし、その後、社会学や人類学を吸収してきました。これらの視野と方法を結び付ける研究は「日本学」「アメリカ学」です。

中国の「日本学」は日本から輸入したものです。1980年代初期の日本語ブームや、日本政府の海外における文化援助、拠点援助によって広められてきました。拠点援助は今でも続いています。

各「拠点」の日本学研究はそれぞれの存在立場によって、研究志向、問題意識、方法などが多様化を呈しております。ですから、場所によって機関によって、その「日本学」の内包は非常に広められ（政治、外交、経済も含まれて）、厳格な意味のある整合的な学科ではなくなっています。

### 3 地域研究としての日本研究

三つ目は地域研究としての日本研究です。アメリカの中国研究、日本研究は主に地域研究として取り



扱っております。著名なパークレー大学北東アジア研究センターもその典型的な存在です。日本の現代中国研究、アメリカ研究も同じく主に地域研究として研究機関が設けられております。中国でも地域研究として日本研究をやっており、研究機関を設けたり、大学に研究センターなどをつくっています。

要するに、中国の日本研究はすでに1カ国研究からグローバル視野へ、情熱的な紹介から冷静な研究へ、経済や法律など応用の研究から精神面の研究へ視野を広めています。ですから、深層の日本研究を求め、私たちには「方法としての日本研究」「思想としての日本研究」が期待されております。

中国の日本研究は成熟しているとは言えません。まだたくさん困難を抱えております。第1に、実地調査が少ないので原始的な情報が不十分です。第2に、中国の日本研究は日本の日本研究、アメリカの日本研究からの影響が非常に大きくて、知識論や方法論から見て中国なりの研究がまだ不十分です。第3に、優秀な人材が日本研究より他の専門分野に先にとられてしまいます。特に中日関係がよくない、順調でないときに、人材は、分かりにくい日本から遠ざかります。

たしかに日本は分かりにくいところがあります。魯迅の兄弟である周作人は長期に日本に滞在した著名な日本研究者ですが、彼も「日本の文化が話せるが、日本の国民性がなぞのように分からず、矛盾な現象を解釈できない」と言っておりました。文化人、エリートたちの困惑は今日まで延長しております。

## 終わりに

最後に、日本は転換期におかれております。つまり、ポスト成長期の日本は、これからの社会、経済のあり方について模索をしております。バブルが崩壊してから「失われた10年」「失われた15年」「失われた20年」にわたり試行錯誤を辿ってきた日本経済、社会のあり方、それを実現するための方策などを明らかにするには、まだ時間がかかるかもしれません。1868年の明治維新後、法律がすべてそろって整備されたのは、1890年代の終りです。戦後も20年ほど経過して所得倍増の高度成長に定着しました。今度の転換期も、明確な方向が見えるまでにはそれぐらいの時間がかかるのではないかと思います。

しかし、日本はアジアにおいて相変わらず最も成熟した現代国家です。これは中国の日本研究者の常識として受け入れられております。今の日本の経験と教訓はアジア諸国、特に東アジア諸国にとって非常に有意義です。

中国は今高度成長期にあり、日本からも非常に高く評価されております。しかし、必ず高度成長期が終わる日を迎えるに違いありません。そのときの中国はどうなるのでしょうか。私は、今の日本の経験を見たい、勉強したい、続けて日本を「モデル」にしたいと考えております。今、改めて日本に対して希望を持っております。それこそ私たち日本研究者にとり、研究の価値があるのではないかと思います。

私の話が中国人の日本認識、私たちの間の相互理解を深めるためにお役に立てば、非常に幸いです。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

## 質問

日本は非常に分かりにくいということですが、その一つの原因として、中国人のメンタリティで日本を理解しようとするから理解できないのではないのでしょうか。日本人のメンタリティに立って見ないと、おそらく日本は分かりません。

日本人自身も戦後、食べることに集中し、日本人がなんたるかということ振り返る余裕なく走ってきたということからすると、日本人自身が自分たちが何かということを理解していないという時代だと思

ます。

ですから、そこにある日本を理解しようとするならば、やはり日本人のメンタリティ、ものの考え方と、中国の人のものの考え方の違いをまず理解しないと、理解はできないのではないかと考えております。意見であります。

李

お話に賛成したいと思います。つい最近、新聞で読んだのですが、ヨーロッパは最近統合されて一つの国家のようになっています。憲法にも皆賛成しました。そうすると、これから中国はどういうふうにヨーロッパとつきあうか。新聞には非常に大きく、「異なった文明との接触」というような文字がありました。

そのときに私がまず考えたのは、ヨーロッパではなくて中国と日本のことです。異なった文明、異なった文化との接触というふうに考えなければ、お互いに理解を深めることができないではないか。私たちはいつも同じ漢字を使っているので、同文同種じゃないかと思われる。思い込みました。

しかし、当たり前という前提があると、なかなか突っ込んだ研究ができなくなります。異なるということをもっと前提として考えなければなりません。ですから、今、日本の文化に関する本が、中国の本屋で非常に多く見られるのだと思います。